

パラグアイ共和国におけるシニア海外ボランティア体験記

元シニア海外ボランティア 小海英夫

派遣期間： 2001年10月～2003年10月

派遣先：パラグアイ共和国 イタプア県カピタンミランダ市役所

指導科目：ごみ処理技術を含む都市環境保護教育

パラグアイ共和国の概要

国土の面積： 約40万6千平方km 日本より約10%広い。

人口： 約6百万人 日本の約1/20。

おもな人種： 先住民インディオ、グアラニー族とスペイン人の混血が圧倒的に多く、全体の90%。

他にパラグアイの独立(1810年)後、ヨーロッパ、ドイツ、ベルギー、ロシアなどからの移住者、東洋、中国、韓国、日本からの移住者もいる。日系人は約7千人程度。

国土の特徴： 南米大陸の中央に位置し(地図 1)、周囲に海がなく、ブラジル、アルゼンチン及びボリビアと接して、山岳地帯のない広大な平野、国の周囲はほとんど大きな川が国境となっている。

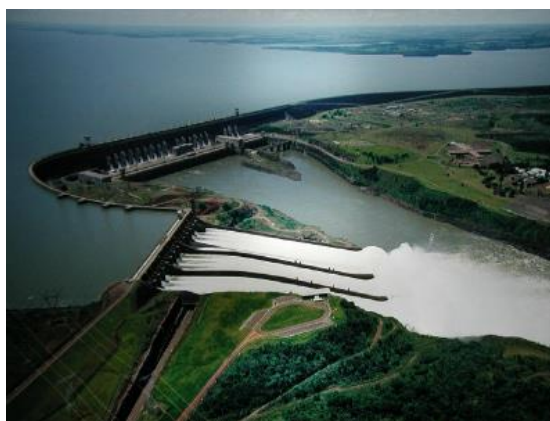
広い緑の大地、豊かな水、素晴らしい自然に恵まれて、無くて素晴らしいたくさん「無い」がある。砂漠が無い、トンネルが無い、人種差別が無い、地震が無い、津波が無い、台風が無い、煙突が無い、火力発電所も原子力発電所も無い。多くの素晴らしい「無い」がある一方「有る」で困るものとして、役人の汚職天国がある。

おもな産業： パラグアイの主たる産業は農業と牧畜業及び水力発電であり、おもな製品は大豆、小麦と牛肉である。大豆は日本人が力を合わせて改良したパラグアイで最も重要な輸出品で、大豆の品種改良、収穫増大に貢献した日本人の功績は高く評価されている。

パラグアイの周囲は大きな川に恵まれており隣国ブラジルと共同運営の世界1位のイタイプ水力発電所(1260万kw)(写真 1)と隣国アルゼンチンと共同運営の世界8位のヤスレタ水力発電所(308万kw)がある。発電量の半分



がパラグアイのものであるが、パラグアイではそれほど多くの電力を必要としないので、残りをそれぞれブラジルとアルゼンチンに買い上げてもらい国庫収入の大きな財源となっている。



世界最大のイタイプ水力発電所 1260 万 kw

ボランティア業務：

人口が少なくて広い土地のあるパラグアイにごみ問題はまだ深刻ではないが、このままでは将来大変なことになる、気づいたカピタンミランダ市長ジェゲールさんが、近隣六つの自治体の市長さんたちに呼びかけて、「今はまだごみ処理行政の必要はないが、高分子化合物ゴミや金属ゴミが勢いよく増え続けると、将来、ごみ処理行政が必要になりそうだから、今のうちに将来のごみ処理行政担当予定者を決めて、ごみ処理問題の勉強をさせておこう、そのために日本の JICA に頼んでごみ処理技術の先生に来てもらおう」と相談がまとまり、その案件に応募した私が派遣されてここに来た。

7 つの自治体から各市長さんに指名された将来のごみ処理行政担当者が私のカウンターパートとなって毎週土曜日にカピタンミランダ市役所に集まって私と勉強会をすることになった。彼らにも仕事があり、月曜日から金曜日までは集まれないので土曜日に集まって勉強会を開いた。

私は日曜日を除いて毎日カピタンミランダ市役所に出勤し、月曜日から金曜日までは、この周辺地域で発生する環境問題について市長や市会議員から相談されるいろいろな問題について、検討したり、現場調査を行ったり、土曜日の勉強会の準備を行ったりした。

カピタンミランダ市の市会議員は仕事を持っているので昼間に会議を開けないので毎週月曜日の夜 7 時から市議会を開いていた。議員に相談を受けた案件について頻りに市議会の場に出て調査結果の報告を行った。

日曜日：

カピタンミランダ市の近くのエンカルナシオン市（パラグアイで 3 番目の都市）にマンションを借りて、月曜日から土曜日までカピタンミランダまでバスで通った。バスに乗ってしまえば 15 分ほどで着くのだがバスが時刻表通りに来ないので、日によっては 30 分も 40 分もバスを待たされる日があり、片道平均 1 時間以上を要し、この疲労はかなりなものであったが、

日曜日は市役所が休みである。日曜日は憩いの日であった。

日本棋院の故岩本薫九段は世界に囲碁を広めるためにヨーロッパや南北アメリカ、各地に囲碁の巡回指導に出かけていたことはよく知られている。私が住んでいたマンションの近くに、故岩本九段に指導碁を打ってもらったことがあることを誇りにしている日本人が居た。囲碁好きの私はすぐにその方と親しくなり、その人の家に招かれて囲碁を打った。その人も 1950 年代に農業移住した一人であったが、苦勞の末に大きな自前の商店を持つ商人として成功し、数年前に日本に里帰りして、ン百万円かを奮発して本カヤ 6 寸盤の立派な碁盤を買ってパラグアイに送り、自宅で大切に扱っていた。



写真2 パラグアイにもあった高価な碁盤

時々日曜日に彼の家を招かれて囲碁対局するのが私のパラグアイ在任中の大きな喜びであった。

食べ物：

パラグアイ人の中にも主食をお米としている人もいたが、お米以外にマンジョーカと言う芋科の植物を主食としている人も多くいた。パーティーなどの主役は圧倒的に焼き肉である。日本のように薄くスライスしたものでなく、kg 単位の大きな塊を何時間もかけて焼くのである



写真3。豪華な焼き肉、焼けるのに 1 時間ぐらいかかる。

私のマンションにカウンターパートを招いて 10 人で焼き肉をした時、12kg の牛肉を用意していてちょうどよかった。日本で 12kg の牛肉を買えば破産するがパラグアイの牛肉は安く、最上の牛肉でも kg 当たり日本円に換算して 200 円程度であった。

パラグアイの食生活で魅力なのは安いフルーツである。大きなパイヤ、マンゴー、メロンなどが大抵 日本の値段の何十分の 1 であった。日本でメロンは一個 1000 円以上するのは珍しくないが、パラグアイでは大抵 50

円～80 円ぐらいが普通であった。だからボランティアに JICA から給付された生活費の範囲でも好きなだけ買うことができた。パラグアイ人の収入は貧富の差が非常に激しく、一般論として言うのは難しいが、私が見聞した 1 例で言うと、市役所の職員で 30 歳の青年が日本円に換算して約 2 万円足らず、40 歳代の国立大学の教授で約 4 万 2 千円であった。こんな安い給料ではまともな生活ができないとぼやきながらアルバイトに励んでいる様子が見えた。その一方で大規模な商店主や農場経営者には計り知れないほど莫大な収入があるように見えた。

結婚式： 私の勉強仲間(カウンターパート)の息子さんの結婚式に招待された時のこと、結婚式は教会で夜の 8 時半から始まり、参列者約 100 名ほどが参列し、結婚式が済むと花嫁花婿が出口に立って、花嫁は参列者の男性全員から両方の頬っぺたにキスを受けた。

教会で結婚式が終わると近所の大きな建物、収穫物の倉庫らしい建物にセレモニー業者が綺麗に装飾を施した披露緑の会場に移って、22 時過ぎにようやく披露宴が始まり、終わったのが夜中の 0 時過ぎ。結婚式に限らずパラグアイ人の夕食はいつでも非常に遅く、時々夕食に招かれることがあると、大抵夜の 10 時以降に始まるのが普通であった。

文化の違い： ある日の勉強会でカウンターパートの一人から質問を受けた。パラグアイは 1860 年代に、ブラジル、アルゼンチンとウルグアイを相手に 3 国戦争をやってぼろ負けに負けた。その戦争前は南米で最も早く蒸気機関車を走らせるなど、南米の最先進国であったパラグアイが 3 国戦争に負けて 100 年以上も経過したが、いまだにパラグアイは立ち直れず、南米の最後進国となっている気がする。日本は太平洋戦争に負けて 30 年もしないうちに復興し、60 年近くたった今では世界の経済大国として立派な国に成長している。パラグアイ人と日本人の間に何か大きな違いがあるのかもしれないが、その違いは何だと思うか？この様な質問を受けた。私はこの国に来てずっと感じていたことがあったので、こんな答えをした。その一つは、パラグアイの本屋に入ると、いつでも店の中に客がほとんど入っていない、そして店においてある本にはビニールカバーが掛けられており、客が自由に本を開いて中を見るができない。店の人になぜこんなカバーをかけているのだと聞くと、「カバーをしていなければタダで立ち読みされて本が売れなくなる。」と答えが返ってきた。日本の本屋ではいつでも大勢の客が自由に本を開いて中を見て、そしてレジではいつでも何人かの客が本を買っているが、私はパラグアイの本屋で本を買っている客の姿を見たことがない。多分ほとんどのパラグアイ人に読書の習慣がないのではないかと思っている、もう一つは、個人と個人が時刻と場所を決めて待ち合わせる約束をし

た時、パラグアイ人はいつでも当然のように約束の時刻に遅れる、そして遅れることをほとんど気にしていないように見える。日本人は普通、約束の時刻は厳守する。1分でも遅れた場合は理由を説明して謝るのが普通である。読書の習慣と時刻厳守の習慣、ここに大きな文化の違いを感じているが、この二つは戦後の復興やら国の産業の発展に大きく影響しているのではないかと思う。この答えにカウンターパートは完全に同意してくれた。

日本人会： 私が住んでいたエンカルナシオン市にも日本人会があり、2年間滞在の私にも入会が奨められたので、当地の日本人会に入会した。時々日本人会の集会有り、私も参加して、パークゴルフやアサードフィエスタ(焼き肉パーティー)にも参加させていただいた。ある日の日本人会に参加した時のこと、この日の議題は最近日本人会に加入する日系人が減って、特に若い人の日本人会離れが目立つが、どうしたらそれを食い止められるかということについてであった。ほとんどの会員はパラグアイに移住して50年以上になる1世、2世、3世がほとんどでスペイン語には不自由しない人達である。でも日本人会の会議の場では日本語が使用されていたので、私のような新参加者にも分かりやすくよかった。会議の場で発言するのはほとんど1世と思われる年配者か2世でもかなりの年配者が多かったので、司会者がもっと若い人の発言が欲しいと言うと一人の青年が挙手して、たどたどしい日本語で「スペイン語でしゃべってもよいか？」と尋ねた。司会者は他の参加者の同意を得て、その青年に許可した。すると青年は流ちょうなスペイン語で話し始め、その青年の発言が終わると、すぐに他の青年がやはり流ちょうなスペイン語で話し、次々に多くの青年がスペイン語で発言した。彼らの発言内容は、今までは日本人会の場ではいつも日本語が使われて、われわれ若い世代の日系人には非常に発言しづらかった、日本語は若い世代のものには外国語と同じである。日本人会が運営している日本語学校で一応日本語を学んでいるが、お年寄りのように自由に日本語をしゃべることはできない、だから今まではずっと黙っていた。今後日本人会の場でもスペイン語でしゃべってもよいということになれば若い世代が大勢入会するようになると思う、およそこんな内容のことをしゃべっていた。そのあとはお年寄りたちもスペイン語で発言するようになった。多くの日系1世が移住しておよそ50年経過して、日本人会の言葉が日本語からスペイン語にかわると言う歴史の転換点に立ち会ったような気がした。